

2017年9月20日

立教大学国際学術研究交流制度
2017年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	河野 哲也
受入学部・研究科・研究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Lecturer, Department of Psychology, University of Copenhagen 協定の有無：無 所在国：デンマーク
	氏名	Sofie Pedersen
招へい期間		2017年8月1日～2017年8月30日（30日間）
研究経費		692,270円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2017年8月1日	来日
2017年8月3日	講演「Disconnected Activities」、池袋キャンパス 12号館 2階ミーティングルーム、参加者8名
2017年8月7日	講演「Historicizing Affordances」、池袋キャンパス 12号館 2階ミーティングルーム、参加者11名
2017年8月18日	講演「The Human Eco-niche- explorations and theoretical considerations」、池袋キャンパス 12号館 2階ミーティングルーム、参加者10名
2017年8月22日	講演「Not just a school」、ロイドホール 5階 L533、参加者8名
2017年8月29日	研究会「デンマークの心理学と日丁共同研究の可能性」、ロイドホール 5階 L533、参加者6名
2017年8月30日	離日

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

講演会(1)「**Disconnected Activities: working with mental illness from a perspective of activity theory and ecological psychology**」では、デンマークにおける精神医療の実践について、講演者自身が携わっている活動を含めた説明と、それに関する理論化のためのツールとして生態心理学の有効性が提案された。

学内の学生、大学院生、研究者のほかに、学外からの参加者もあり、当初の予定以上の活発な議論が行われた。学生からは英語によるデンマークの実践についての質問がなされ、研究者とは、日本では論じられることが多くない、ヨーロッパ、とくに北欧における生態心理学の独自の展開について意見の交換が行われていた。

講演会(2)「**Historicizing Affordances – a rendez-vous between ecological psychology and cultural-historical theory**」では、生態心理学の二つの潮流についての説明とそれと関連してキーワードである「アフォーダンス」という考え方をどのように受容し、展開するべきであるかについての講演がなされた。

一回目と同様に、学内の学生、大学院生、研究者のほかに、学外からの参加者もあり、活発な議論が行われた。近年、研究者の間ではよく使われる「アフォーダンス」という考え方について、国際的な視点から参加者一同が再考するための貴重な機会を得ることができた。

講演会(3)「**The Human Eco-niche– explorations and theoretical considerations (in relation to analyzing youth life variations)**」では、生態心理学のなかでも「ニッチ (エコニッチ)」という考え方に注目して講演がなされた。特に、「ニッチ」を作る、あるいは参加するといった「ニッチ」とのかかわり方を中心にすすめることで、「環境」と「ひと」、さらには「ひと」と「ひと」との相互作用について興味深い議論が提示された。

学内から学生・院生・研究者の参加者に加え、学外からも継続して参加している者もあり、各回完結型だけではなく、継続的な議論がなされた。特に、日本ではそれほど研究の多くないバーカーによる生態心理学についての議論が中心になされ、生態心理学一般を社会化するための展望について各人が有意義な成果を得たものと考えられる。

講演会(4)「**Not just a school - the concept of behavior setting as an analytical tool for the study of developmental possibilities in institutional settings**」では、よりペダーセン氏独自の立場の展開がなされた。バーカーとギブソンふたつの生態心理学がそれぞれやや別の仕方で論じている「場所 (環境)」の重要性に注目し、特に、「場所」がどのような振る舞いを導きやすいのか、あるいはある振る舞いを導くためにはどのような「場所」が望ましいのかについての考察が示された。

参加者の構成はこれまでとはやや異なり、学内の学生や院生よりも、学外の研究者が多かったが、その分、やや専門寄りの濃密な議論が展開された。

研究会「デンマークの心理学と日丹共同研究の可能性」では、デンマークにおける現状が説明された後で、参加した日本、フランス、デンマークの研究者の間で、今後の展開についての話し合いがなされ、今後共同研究を行ない、国際学会などでその成果を発表することが確認された。